



いま『ゼロタイガー』の楽しさを

私はプライベートでも、もちろんパチンコを打つのが大好きです。中でもやはり、初心者の頃からずっと今でも好きなのが、「羽根物」というジャンル。厳密に言うと、現在は種別が撤廃されているので「羽根物タイプ」とでも分類されるのでしょうか、とにかく「チャッカー入賞で開閉する羽根に拾われた玉が、V入賞すれば大当たり」という、アナログなプロセスがメインのこのタイプが、一番遊べて楽しいと感じるのです。現在好きな羽根物は『CRA TOKIO PREMIUM』で、同シリーズは88年に登場した元祖『ザ・トキオ』以来、個人的に一番多く打っているといえるかもしれません。

その「羽根物」は、今からちょうど35年前の1981年4月に誕生しました。元祖となったのは、多くの方がご存知の『ゼロタイガー』という平和の機種です。そして今年に入り、雑誌のお仕事で当時の開発を担当されていた方とお会いすることができました。『ゼロタイガー』を設計したのは、元・平和開発部の中嶋正さんという方で、2005年に退社後役物設計などを行う会社を設立し、現在は会長職に就かれています。

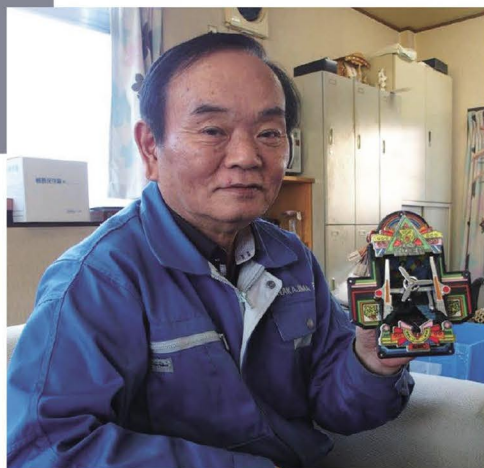
ちなみに『ゼロタイガー』登場以前は、70年代中頃から電気で動く役物（電役）が普及し始め、80年にSANKYOから第一種の元祖『フィーバー』が誕生して、業界に革命を起こします。そんな中、羽

単発で終わってしまった『ゼロ戦』に、繰り返しのチャンスとなる「Vゾーン」そして「ラウンド」という概念を盛り込んだのが、羽根物一号機となる『ゼロタイガー』だったのです。

同機種は、新潟を皮切りに全国で人気に火が点き、大ブームを巻き起こしました。私は当時高校生でしたから、残念ながらリアルタイムでのブームや熱気を体験することはできなかったものの、90年代半ばに雑誌などの企画で、地方に残っている『ゼロタイガー』を何とか打つことができたのを覚えています。その時は、喜びもさることながら自分自身が大好きな羽根物の元祖をやっと体験することができたという、安堵や達成感のような気持ちが大きかったですね。

そんな私をはじめ、多くのパチンコファンから愛される羽根物において、やはり『ゼロタイガー』という存在は聞けば聞くほど画期的でありました。例えば、85年から始まった保通協検査においても、第二種の規定はこの機種が基本となっていること、さらには他メーカー関係者が当時その作り方を平和に勉強に来て、羽根物の普及に大きく役立っていたこと。そういった、いわゆる「後日談」のようなエピソードは枚挙にいとまがなく、個人的に「生まれてくれて有り難う！」というような気持ちになりました（笑）。

しかし、かつて「パチンコの入門編」であった羽根物も時代とともに存在感が薄れ、近年低射倖性の機械が望まれる環境になり、やっと本格的に復活ののろしが上がるようとしています。パチンコから忘れられつつある「玉の動きを目で追う」という、基本的な楽しさ。先ほどの中嶋さんも「今後も多くの方に羽根物を楽しんでほしい」とおっしゃっていた通り、パチンコ本来の楽しさを求めてお金を遣ってくれる羽根物ファンを増やしていくことこそが、市場にとって必要であるに違いないと思っています。



『ゼロタイガー』開発者の中嶋正氏

じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」（バジリコ、07年）